

PAC 分析学会

第 5 回大会

プログラム・発表抄録集

2011 年 12 月 17 日 (土)

国際基督教大学

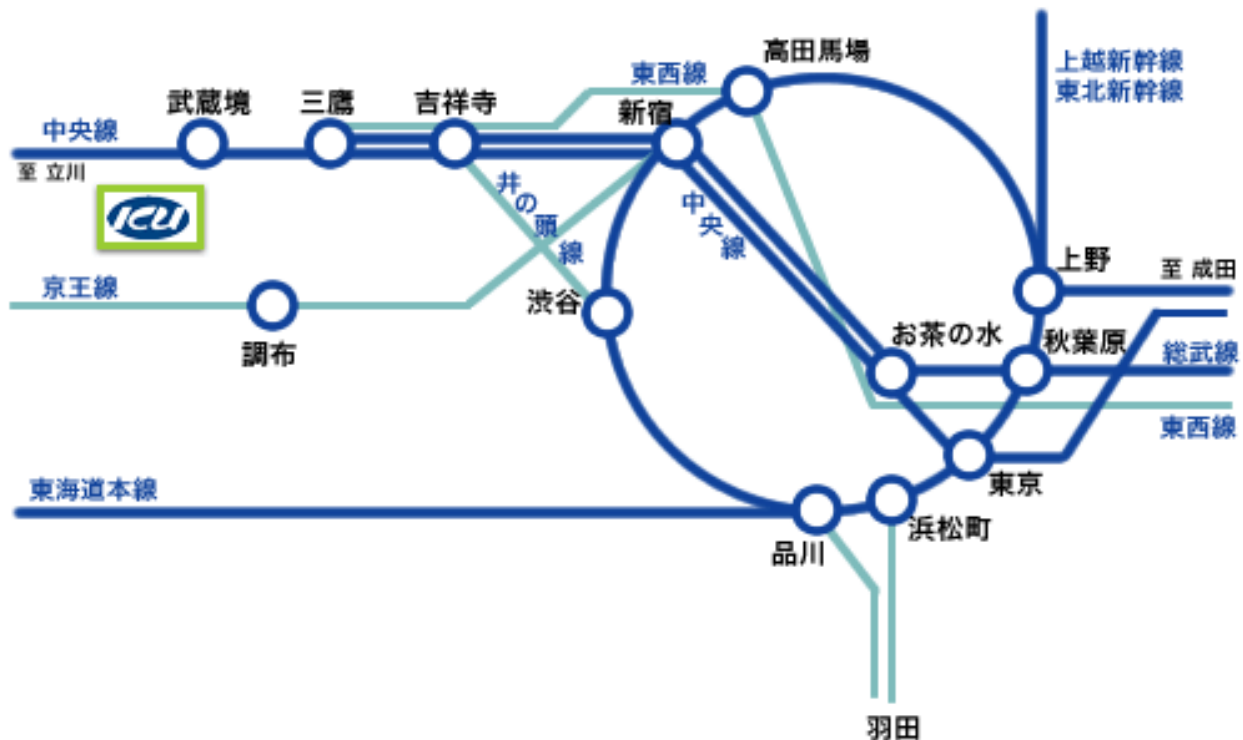
大会会場へのアクセス

国際基督教大学 (ICU)

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 (アクセスマップはこちら)

TEL 0422-33-3343 (小澤研究室直通)

※学内・近隣には十分な駐車スペースがございませんので、お車での来場はお控えください。



● 飛行機利用の場合

羽田空港 (東京国際空港) → 東京モノレール (羽田空港第1ビル駅 or 第2ビル駅～浜松町駅) または京浜急行 (羽田空港駅～品川駅) → JR 山手線または京浜東北線 (浜松町駅 or 品川駅～東京駅) → JR 中央線 (東京駅～武蔵境駅 or 三鷹駅)

● 新幹線利用の場合

東海道・東北・上越新幹線 (東京駅) → JR 中央線 (東京駅～武蔵境駅 or 三鷹駅)

● 電車利用の場合

① JR 中央線 武蔵境駅南口から

- ・小田急バス「国際基督教大学」行終点下車（乗車時間約 12 分，大学構内まで）
- ・小田急バス「狛江営業所」行，「狛江駅北口」行または「吉祥寺駅」行乗車「富士重工前」下車（約 10 分）→徒歩 10 分。

② JR 中央線 三鷹駅南口から

- ・小田急バス「国際基督教大学」行終点下車（約 20 分，大学構内まで）
- ・小田急バス「武蔵小金井駅」行または「調布駅北口（西野御塔坂下経由）」行乗車「富士重工前」下車（約 20 分）→徒歩 10 分。

③ 京王線 調布駅北口から

- ・小田急バス「武蔵境駅南口」行または「三鷹駅（西野御塔坂下経由）」行乗車「富士重工前」下車（約 20 分）→徒歩 10 分。



会場は大学本館 2 階 260 号室です。キャンパスマップ（次頁）#1 の建物です。



- 1 大学本館 University Hall
- 2 図書館 Library
- 3 ミッドレット・トップ・オスマー図書館 Mildred Topp Othmer Library
- 4 理学館 Science Hall
- 5 教育研究棟 Education and Research Building
- 6 第2教育研究棟 Education and Research Building II
- 7 総合学習センター Integrated Learning Center
- 8 博物館 清溪人形記念館 ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum
- 9 体育館・学的アール・セントラルロッカー Physical Education Center/Central Locker Building
- 10 スポーツ・クラブハウス Sports Clubhouse
- 11 グラウンド Grounds
- 12 ティップエントルファー記念館(東棟) Diffendorfer Memorial Hall(East Wing)
- 13 ティップエントルファー記念館(西棟) Diffendorfer Memorial Hall(West Wing)
- 14 大学礼拝堂 University Chapel
- 15 シーベリー記念礼拝堂 Seabury Memorial Chapel
- 16 大学食堂 Dining Hall
- 17 東ヶ崎洋記念ダイアログハウス Kiyoshi Togasaki Memorial Dialogue House
- 18 カウンセリングセンター Counseling Center
- 19 本部棟 Administration Building
- 20 アラムナイハウス Alumni House
- 21-30 学生寮 Student Dormitories
- 31 教職員住宅 Faculty and Staff Residences
- 32 泰山荘 TAIZAN-SO
- 33 高等臨床心理学研究所-心理相談室 Institute for Advanced Studies of Clinical Psychology-Psychological Consulting Services
- 34 セントラル・パワーステーション Central Power Station
- 35 国際基督教大学高等学校 ICU High School

大会参加者へのご案内

1. 受付

受付は大会会場（本館 260 号室）前になります。事前に参加希望の連絡をされた方は受付で参加費等をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

当日参加の方は当日参加申込書にご記入ください。その後、参加費をお支払いいただき、参加証とプログラム・発表論文集をお受け取りください。

2. 喫煙について

所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。（大会開催会場になっている建物内部には喫煙所はございません。）

3. 参加証（ネームプレート）について

参加証はお帰りになる際にお返しいただきますよう、お願い申し上げます。

4. 大会参加費について

本大会の参加費は以下の通りです。

学会員：一般会員 2000 円

学生会員 1000 円

非会員（当日一般）5000 円

非会員（当日学生）1500 円

懇親会参加費用：実費（懇親会場にてお支払いください）

発表者へのご案内

1. プログラム・発表論文集への論文掲載に加え、発表会場での発表によって正式発表と認められます。
2. 1 演題の発表時間は 20 分で、10 分間の質疑応答を設けます。係員が下記のようにベルを鳴らして時間を知らせます。

発表開始	15 分後（残り 5 分）	・・・	1 鈴
	20 分後（発表終了）	・・・	2 鈴
	30 分後（演題終了）	・・・	3 鈴
3. 発表は座長の指示に従って進めてください。
4. 責任発表者が欠席した場合、発表取り消しとなります。連名発表者がいる場合には、大会事務局の承認を得て発表を代行することができます。
5. PowerPoint にて発表される場合、発表会場備付のコンピュータをご使用いただきます（Windows 7（英語） / Mac OS X v10.6.7 Snow Leopard（英語または日本語）を切り替えて使用するタイプの Macintosh のコンピュータ；PowerPoint のバージョンは Windows は 2010，Macintosh は 2011 です）ので、ファイルを USB でご持参ください。当日は、備付機器以外はプロジェクタに接続できませんのでご注意ください。なお、操作は発表者が行うこととなりますので、その点についてもご了承ください。
6. 当日配布資料がある場合にはその旨ご連絡ください。資料の印刷は大会会場ではできませんので、発表者が用意していただきますようお願いいたします（資料は 30 部程度ご用意願います）。

大会行事

本大会行事は全て本館 260 号室で開催されます。

- 12 : 30 ~ 参加受付
- 13 : 00 ~ 13 : 05 開会の辞
- 13 : 05 ~ 15 : 15 大会企画ワークショップ
「PAC 分析の刺激について考える」
企画：小澤伊久美（国際基督教大学）
企画：丸山千歌（横浜国立大学）
解説：内藤哲雄（福島学院大学）
Facilitator：井上孝代（明治学院大学）
いとうたけひこ（和光大学）
岸 太一（東邦大学）
- 15 : 15 ~ 15 : 30 休憩
- 15 : 30 ~ 17 : 00 口頭発表（座長：岸 太一（東邦大学））
発表 I
休学後復学に至ったある国立大学女子学生の PAC 分析—時間的展望をめぐって—
野口康彦（茨城大学）
- 発表 II
被害者の手記を読むことによるデートレイプ被害者像の変化：PAC 分析によるナラティブ教材の効果の検討
北風菜穂子（明治学院大学大学院心理学研究科）
いとうたけひこ（和光大学）
井上孝代（明治学院大学）
- 発表 III
同じ読解教材を刺激としたことがいかに連想に現れたか—留学生 F に対する縦断的 PAC 分析調査から—
小澤伊久美（国際基督教大学）
丸山千歌（横浜国立大学）
- 17 : 00 閉会の辞
- 18 : 00 ~ 19 : 30（予定） 懇親会
（会場は当日の参加状況をもとに決定します）

大会企画・発表抄録

PAC分析の刺激について考える

企画：小澤伊久美（国際基督教大学）

丸山千歌（横浜国立大学）

解説：内藤哲雄（福島学院大学）

Facilitator：井上孝代（明治学院大学）

いとうたけひこ（和光大学）

岸 太一（東邦大学）

1. 企画趣旨

PAC分析の活用において、どのような刺激を提示するかは非常に重要なポイントですが、なかなかじっくりと議論する機会がないように思います。このワークショップでは、初めに内藤先生に刺激を作成する際の留意点などをお話いただいた後、参加者のみなさまにその場で実際に刺激を作成し、ペアになった相手にその刺激を提示して連想語を挙げてもらうということを体験していただきます。そして、その体験を振り返りつつ、刺激を作成するという事について参加者全体で意見交換をします。

2. 本企画の構成

13:05～13:10	企画趣旨説明	
13:10～13:30	PAC分析の刺激についての解説	内藤哲雄
13:30～13:40	質疑応答	
13:40～15:00	シミュレーション活動（刺激作成と連想語の書き出し）	
15:00～15:15	全体での振り返り	

休学後復学に至ったある国立大学女子学生の PAC 分析

— 時間的展望をめぐって —

野口康彦

(茨城大学人文学部)

key words: 休学、復学、時間的展望

1. はじめに

朝日新聞社と河合塾が行った大学に関する報告¹によれば、調査対象の 74%にあたる 560 校の回答から、2007 年春の入学者のうち、11 年 3 月までの 4 年間に退学した学生は 3 万 4015 人で、あり退学率は 7%である。また、学部系統ごとの退学率は、国立大は 1~4%で推移しているが、私立大学は 5%以上であり、私立大のうち、工学系と総合・環境・人間・情報系は 11%にのぼったとしている。

内田 (2008) は、2005 年度の国立大学 47 大学における 3,364 名の退学者の退学理由について、「単位不足・意欲減退」「進路再考」といった消極的理由群が約 50%であったと述べている。また、休学者については、6,326 名 (49 校)のうち、「海外留学」「他大学受験」などの積極的理由と消極的理由はそれぞれ約 30%であるとし、経済的理由などの「環境要因」が約 20%、以後「精神障害」、「身体疾患」が続くと報告している。ちなみに、文系 (4 年制) 男子の休学率は 3.14%であったのに対して、文系 (4 年制) 女子の休学率は 2.81%であったという (理系等も含めた全体では 2.56%)。また、内田は休学傾向について、女子の方に積極的理由が多いと指摘している。男子学生比べて女子学生の休学率が低い理由はさまざまであろうが、一人暮らしによるストレスや生活の乱れ、あるいは卒業後の進路に対する漠然とした不安を男子学生は抱えやすく、それが大学での学習意欲の低下に直結しやすいのではないかと考える。

国立大学は休学中の授業料の納入など、私立大学に比べると休学がしやすい条件にあると言える。だが、「進路の再考」などある一定の期間の休学をした後、復学をするのには、やはり相当の覚悟と頑張りを必要とするのは言うまでも

ない。消極的理由から休学にいたる学生への対応については、留意されるべきであろう。

本発表では、2 年間の休学の後、復学をしたある国立大学の女子学生に対して PAC 分析を用いた調査を行った。休学から復学に至る際に起こった彼女の連想項目を分析しながら、特に、内的構造における時間的展望をめぐって検討したい。

2. 方法

(1) 調査協力者：24 歳の女子大学生 A さん。

(2) A さんの休学の理由：進路の再考が主な理由であった。

(3) 【提示刺激】：「あなたが休学をしてから復学をしようと思った際に、頭に浮かんできたイメージや言葉を 20 個あげてください。」

(4) 手続き：2011 年 10 月から 11 月にかけて 2 回に分けて実施した。20 枚のカード記入後は、重要度順に並べ替えてもらい、その後、それぞれのカードに記された言葉の組み合わせが言葉の意味ではなく、直感的にイメージのうえでどの程度似ているかを A から G の 7 段階 (1~7) で評定をしてもらった。それぞれの項目間で評定された意味上の距離を類似度距離行列としてまとめ、ワード法を用いてクラスター分析し樹形図を析出した。

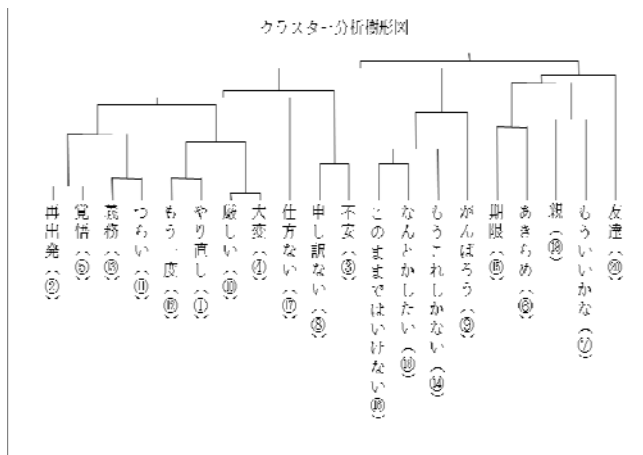
そして、調査者と A さんとの面接を行い、クラスター 1 から、隣り合った項目同士に共通するイメージを聞きながら被験者の言葉を用いてカテゴリー化を行った。そして、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらでもいえない (±、0) のいずれかに該当するかを回答してもらい、最後に、各カテゴリーについての解釈を A さんにしてもらった。

(5) 使用分析ソフト：EXCEL 多変量解析 Ver. 5.0 (エスミ)

¹朝日新聞。「ひらく日本の大学」調査。2011. 7.13. 朝刊。

3. 結果

表1 Aさんのクラスター樹形図



()の番号は最初のカード記入の順番

表2 Aさんのクラスター及びカテゴリー名

クラスター 1 件数 11 比率 55% カテゴリー名 【耐えなくて いけない】	クラスター 2 件数 5 比率 25% カテゴリー名 【復学のきっか け】 【友達】	クラスター 3 件数 4 比率 20% カテゴリー名 【他に道がな い】
連想項目と＋のイメージ	連想項目と＋のイメージ	連想項目と＋のイメージ
再出発(2) ± 覚悟(5) + 義務(13) - つらい(11) - もう一度(12) + やり直し(1) - 厳しい(10) + 大変(4) - 仕方ない(17) - 申し訳ない(8) - 不安(3) - + (3)、± (1)、 - (6) 計 -3	期限(15) ± あきらめ(6) ± 親(19) ± もういいかな (7) + 友達(20) ± + (1)、± (4)、 - (0) 計+1	このままではい けない(16) + なんとかしたい (18) + もうこれしか ない(14) - がんばろう(9) + + (3)、± (0)、 - (1) 計+2
+% : 35%	±% : 25%	-% : 40%

4. 総合考察

「耐えなくてはいけない」他、4つのカテゴリーについて、Aさんに解釈をしてもらった。

休学をした後に復学をするのには、復学のマイナス面があったとしても、やはり義務だからやらなくてはいけないつらさがAさんにはあったという。それらが「耐えなくてはいけない」というカテゴリーとなっている。このカテゴリーの項目のプラスとマイナスのイメージを合計すると-3であり、Aさんの葛藤の高い傾向をうかがうことができる。

「復学のきっかけ」には、休学には自由の期間の制限がされており、さらに、親からの理解も得られないことが自らの気持ちに変化する契機になったという。±(0)の項目が5つのうちの4つを占めることは、自己疎外感の強さの指標(内藤, 2002)として考えることもできよう。また、復学するにあたって人間関係を築いていくことが心配になったことから、「友達」は単独となった。

「他に道がない」のクラスターには、このままではいけないといったAさんの切実さがみられる。だが、項目のプラスとマイナスのイメージの合計は、+2であることから、むしろ前向きに頑張ろうというAさんのポジティブな姿勢ととらえても良いだろう。

表2の下にAさんの連想項目イメージのパーセンテージを提示した。マイナスのイメージが全体の40%を占めている。松田(2009)はドロップアウトを回避する学生の傾向に「ポジティブな時間的展望」をあげている。Aさんにはポジティブな時間的展望があったというよりも、学生という立場の時限的な時間的展望に直面し、自己疎外感と向き合う中で、むしろ開き直っていったのではないかと考える。この点に関する詳細な検討は今後の課題としたい

5. 文献

- ・内藤哲雄(2002) PAC分析実施法入門(改訂版). ナカニシヤ出版.
- ・松田美登子(2009)「メンタルヘルス調査」を退学者対策に繋げるための予備的研究—学生相談室におけるドロップアウト危機の事例を中心に—. 学生相談研究, 30(2), 136-147.
- ・内田千代子(2008) 大学における休・退学、留年学生に関する調査 第28報. 学生の健康白書 2005, 325-354.

Yasuhiko NOGUCHI

被害者の手記を読むことによるデートレイプ被害者像の変化：

PAC 分析によるナラティブ教材の効果の検討

○北風菜穂子¹⁾ いたうたけひこ²⁾ 井上孝代³⁾

(¹⁾明治学院大学大学院心理学研究科 (²⁾和光大学現代人間学部 (³⁾明治学院大学心理学部)

key words: デートレイプ 被害者 手記

問題と目的

デートレイプとは、「二人のうちどちらか一方、もしくは両方が相手に対して恋愛感情をもっている」関係における、1) 強要された性行為、2) 被害者の意思に反して、または被害者の同意なしに行われた性行為、3) 被害者が精神的・身体的に無力な状態での性行為、4) 法的な性的同意年齢（日本では13歳）未満の相手との性行為である。

レイプは長期にわたって被害者に深刻な心理的、身体的、社会的な影響を及ぼす犯罪であり、近年の実態調査では、配偶者からのレイプを女性15.8%、男性4.3%が経験していることが示されている（内閣府，2009）。しかしながらレイプに関する誤った思いこみや信念であるレイプ神話（Burt，1980）があり、“ふしだらな女性だけがレイプに遭う”、“本当に望んでいないなら抵抗できる”、“本当は女性もレイプされることを望んでいる”といった被害者像が社会で広く信じられている。それによって、レイプ被害に遭った責任は被害者側にあると認識されたり、レイプ被害の影響が小さく見積もられたり、婚姻関係や交際関係にあればレイプだと判断されないという問題が生じる（北風・伊藤・井上，2009；北風，2011）。したがって、レイプ神話や誤った被害者像を変容するための介入が必要であると考えられる。

小平・伊藤（2009）は、「患者の病いの体験を患者や家族などが自らの自分の言葉で語った物語が表現された作品であり、学習者にとってその体験の意味を促進したり、助けになる目的で看護教育などに利用される形に教材化されたもの」を「ナラティブ教材」と呼び、偏見や否定的態度の変容に対する有効性を指摘している。そこでデートレイプの被害者像やイメージ、態度の変容を目的とした心理教育におけるナラティブ教材の有効性について、質的に明らかにするため、PAC分析（個人別態度構造分析）（内藤，1997；2002）の手法を用いて検討することが有用であると考えられる。さらに自分自身の被害経験や親しい人の被害

経験の有無によって被害者に対する態度が異なることが知られており、本研究では被害経験のない女子大学生を対象として検討する。以上のことから、本研究の目的は、被害者の手記を読むことによるデートレイプ被害者に対する態度の変容のプロセスについて、PAC分析（内藤，1997；2002）の手法を用いて検討することである。

方法

実験協力者 女子大学生1名である。2010年6月に関連する別の研究の調査質問紙において、今回の面接調査の協力者を募集し、自ら協力を申し出た者に実験参加を依頼した。実験協力者はこれまでに親しい人でレイプ被害にあった者はおらず、これまでにレイプに関する教育経験はなかった。

実験日時 2010年9月に第1回PAC分析、1週間後に第2回PAC分析、計2回の実験を実施した。第1回と第2回の間には、指定した文献を読んでもらうように教示した。

実験材料 本研究では、レイプ被害者の手記である小林（2008）『性犯罪被害にあうということ』（朝日新聞出版）を読むことを課題とし、その前後でのPAC分析を行った。これは著者がレイプの被害に遭い、それからの7年間について、自身の体験を綴った200ページほどの書籍である。被害による身体的、心理的な影響、家族や恋人、友人との関係や被害者支援について語られている。

手続き はじめに実験内容についてのインフォームドコンセントを行い、調査協力に対する同意書と誓約書を取り交わした。その後、内藤（1997）のPAC分析の手順にしたがい実験を実施した。

連想刺激 「デートしている相手の男性にレイプされたとき、女性はどうなふうを感じるでしょう。どんなことを考え、どんなふうに行動するでしょうか。その直後、しばらく時間が経過したとき、さらにかなり時間が経過したときどのような変化していくでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号を付けて

カードに記入してください。」と教示した。

分析ソフト HALBAU for Windows Ver.6.24 を用いて結果を分析した。

結果

第1回 PAC 分析の反応語は23項目であり、デートレイプ被害者のイメージについて、肯定的イメージは6個、否定的イメージは11個、中立的イメージは6個であった。

クラスター分析の結果から、大きく3つのクラスター構造が見出されたため、それらについてのイメージを聴いていった。

クラスター1は、“後悔”から“死”までであり、【被害後の気持ちを一人で抱え込む】のイメージと解釈できる。被害直後、レイプされたという事実についてのショックが大きく、ネガティブな感情を体験しているが、それをひとりで抱え込むようとしているイメージである。クラスター2は、“忘れようと思う”から“周囲を気にする”までである。このクラスターは、被害からしばらく時間が経過した頃の、【日常の人間関係に生じる困難】のイメージであると考えられる。クラスター3は、“裏切り”から“失望”までである。このクラスターは、被害から長い時間が経過し、未来に目を向けるが、そこに資源が見いだせず、希望が見いだせない状態、救われない、先がないという【失望】のイメージであると考えられる。「信じてた人とか物事が変わっちゃうのがつらい」「裏切り」、「自分の気持ちとか相手のこととかをよく考えたうえで被害にあったことは変えられないって理解した」「つかれ」、「被害にあったことを忘れたがってる」「遊ぶ」、しかし何の解決策も見つからないという“失望”がまとまったクラスターである。以上のように、第1回 PAC 分析のクラスター構造を解釈すると、ひとりで苦しい気持ちを抱え、周囲の人間関係を継続することにも困難が生じ、やがて孤立していき、未来に向けて解決策や資源が見つけれない被害者像である。

文献を読んだのち、デートレイプ被害者のイメージについて、第1回のPAC分析と比較するため、第2回PAC分析を行った。反応語は20項目であり、肯定的イメージは9項目、否定的イメージが9項目、中立的イメージは2個であった。3つのクラスター構造が見出された。

クラスター1は、“人に相談する”から“人と会う”までである。被害からしばらく時間が経過したのちの【人と会う】被害者のイメージであると解釈できる。「被害にあったことをなるべく考えな

いようにしたい」、「自分の気持ちは少しずつ分かってきている」、「誰かと一緒にいることで、自分が感じている嫌なことを消そうとしている」と語られている。このクラスターは第1回にはなかったもので、文献を読むことによって生まれてきた新たな被害者のイメージといえるだろう。クラスター2は、“泣く”から“一人になる”までのクラスターである。被害直後からしばらく時間が経過するくらいまでの時期であり、【一人になる】被害者のイメージである。「だれか話を聞いてあげられる人がそばについていたほうがいいのか」、「自分だけで被害にあったことを考えるよりはたぶん人がいたほうが良い」と、しきりに「人が一緒にいてあげたほうが良い」と語った。クラスター3は、“怒り”から“気づかれないようにする”までである。“怒り”は、「相手に全部押しつけている」、「暗いイメージが少ない」、「未来のこととかは考えられている」といい、「被害にあったっていうことを考えたくない」という“話題を避ける”や、「周りの人のことを考えてる」、「自分の気持ちを大分整理できてきている」、「自分ひとりで被害にあったっていうことに対して何とかしようって思っている」、「自分でも被害にあったことをあんまり考えたくない」という“気づかれないようにする”のまとまりである。このクラスターは、被害からは長い時間が経っており、自分の気持ちを無視した相手に対して怒りを向けるプロセスを経て、感情を自分の中におさめようとするイメージであると解釈できる。また周囲の人の存在も語られており、クラスター3は、被害体験を抱え、【気づかれないように生きていく】イメージであろう。

以上のように、被害者の手記を読んだ後の第2回目のPAC分析では、被害直後からしばらくは、一人で混乱・呆然とし、抑うつ的になりながら感情を整理しており、その後、葛藤しながらも周囲の人に話し、理解してもらおうとしたり、自分の苦痛を減らそうと行動したりして、相手への感情を自分なりに納得させながら生きていくという被害者像が示された。

総合考察

総合的解釈の結果から、実験協力者は、デートレイプ被害者個人内の心理的なプロセスに焦点化していた第1回と比べて、被害者の手記を読んだのちの第2回では、環境に働きかけ、相互作用しながら、自分なりに問題に対処していこうとする被害者の姿をはっきりと感じとっていることが推察された。本研究で用いた小林(2008)の手記で

は、自身の内的なプロセスとともに変化する対人関係のあり様について語られている。周囲の人に話したり、理解してもらおうとして生じる葛藤も大きい、それによって得た力や未来への希望を読みとることができる。実験協力者は、手記からそのような部分を読みとり、被害後のプロセスに人間関係への希望を見出したことが推察され、レイプ被害者を取り巻く環境への心理教育的なアプローチとして有効であると考えられる。

また、クラスター構造を解釈していく際、実験協力者は「自分」という主語で語っていた。協力者は女性であり、レイプ被害者と同一化して、この問題に対して考察を深めていたことが推察される。このような被害者の手記を読むことの効果として、小平・伊藤（2009）を参照して考察する。小平・伊藤（2009）では、看護学生が精神障害者の闘病記を朗読する実践を紹介し、ナラティブ教材が「学生の想像と現実のギャップを柔らかく埋めながら、正しい理解に導く役割をはたしてくれる」ものであり、「まだであったことのない未知の対象に対する苦しみへの共感が刺激され」と考察している。本研究の実験協力者は、レイプ被害者の手記を読んで、もともとイメージしていた被害者像と実際の被害者の体験との間にあったギャップに気づき、自らの出した反応語やクラスター構造を解釈していくことによって、被害者の苦しみに共感しながら、「人に相談する」といった具体的な行動をイメージするようになった。ナラティブ教材を読み、その体験による「気づき」をPAC分析によって明確化していく作業を行うことによって、デートレイプ被害者に関するイメージの変容が起こったと考えられる。井上・伊藤（1997）は非言語的技法としてのPAC分析の有効性のひとつとして、クライアントの内的表現を援助することを挙げている。連想反応語をカードに書き、自分の出した反応語に基づいて、結果の解釈を行うため、表現が引き出しやすくなり、実験協力者はいつの間にか『自分がデートレイプ被害にあったら』というイメージを語る事ができたと考えられる。

また、PAC分析は「ひとりひとりの問題に合わせた心理テストをその場で作成し、個人内構造を分析する」（内藤，1997）という機能があり、質問紙の項目に回答するだけでは明らかにできない、その人個人に特有の変化を明らかにすることのできる手法として、その有効性が示されたといえよう。井上（1998）が「評価査定機能」と位置付けたように、心の内面の質的变化を見るために、PAC分析を事前事後テストとして用いることの方法的

有効性について明らかにされた。

本研究の限界として、PAC分析により女子大学生の個人内のイメージや態度の変容について詳細に検討した。女子大学生が被害者に同一化し、被害者の体験に気づいていくプロセスを踏みやすかったのに対し、レイプ被害の数では圧倒的に少ない男性の場合については検討できなかった。今後、男性も対象にして行う必要がある。また、フォローアップ調査を行い、長期的な態度構造の変化について検討することや、そのような被害者のイメージや態度の変容が、どのような行動の変化につながるのかについても検討が必要である。

文献

- Burt, M. R. (1980). Cultural myths and supports for rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 217-230.
- 井上孝代（1998）. カウンセリングにおけるPAC（個人別態度構造）分析の効果 心理学研究, **69(4)**, 295-303.
- 井上孝代・伊藤武彦（1997）. 異文化間カウンセリングにおけるPAC分析技法 井上孝代（編）異文化間臨床心理学序説 多賀出版（第4章（pp.103-137.））
- 北風菜穂子・伊藤武彦・井上孝代（2009）. レイプ神話受容と被害者□加害者の関係によるレイプの責任判断に関する研究 応用心理学研究, **34(1)**, 56-57.
- 北風菜穂子（2011）. レイプ支持態度がデートレイプの判断に及ぼす影響--強要戦術、被害者の心情との関連 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要 **16**, 13-29.
- 小林美佳（2008）. 性犯罪被害にあうということ 朝日新聞出版
- 小平朋江・伊藤武彦（2009）. ナラティブ教材としての闘病記 一多様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用 マクロ・カウンセリング研究, **8**, 50-67.
- 内閣府（2009）. 男女間における暴力に関する調査 内閣府 <<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h18report2-5.pdf>>（2010年9月28日取得）
- 内藤哲雄（1997）. PAC分析の適用範囲と実施法 人文科学論集人間情報学科編（信州大学）**31**, 15-25.
- 内藤哲雄（2002）. PAC分析実施法入門 改訂版：“個”を科学する新技法への招待 ナカニシ



Figure 1 PAC 分析 (第 1 回) のクラスター構造

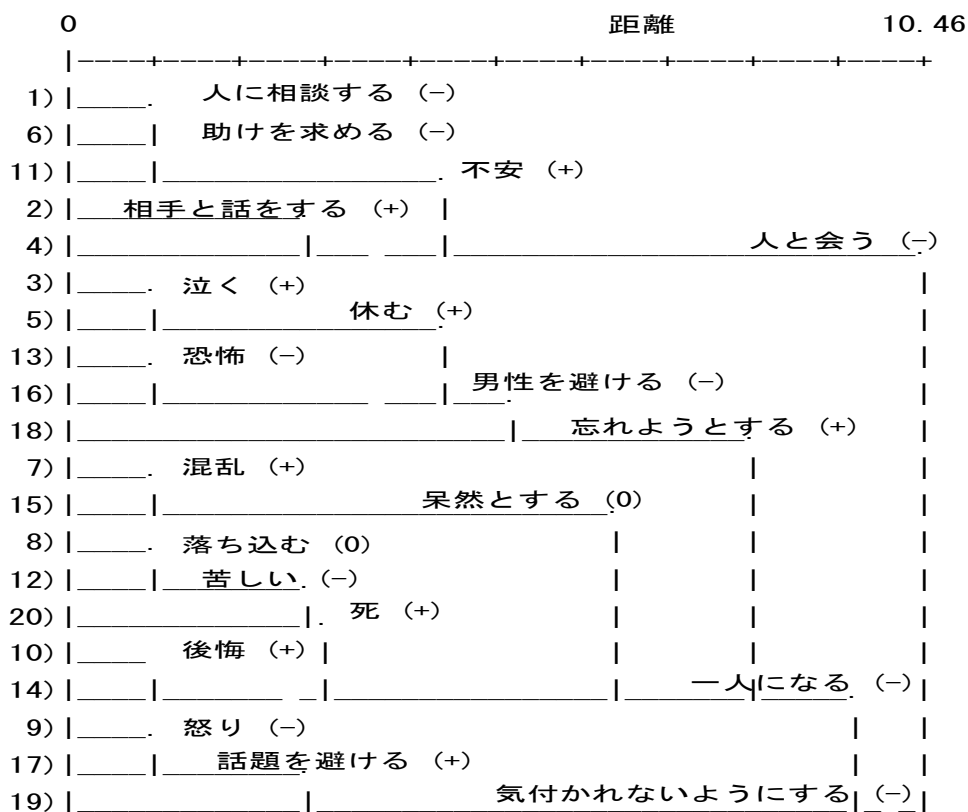


Figure 2 PAC 分析 (第 2 回) のクラスター構造

同じ読解教材を刺激としたことがいかに連想に現れたか

—留学生 F に対する縦断的 PAC 分析調査から—

○小澤伊久美(国際基督教大学日本語教育課程)・○丸山千歌(横浜国立大学留学生センター)

key words: 留学生、日本語読解教材、同じ刺激

はじめに

発表者らは、学習者と読解教材とに焦点を当て、学習者がステレオタイプの読解教材を読んだ場合、どのような影響を受けるのか、またその影響は学習者のどのような属性とどのような関連があるのか、留学体験がそこにいかに関わるのかを縦断的に調査してきた(丸山 2007、丸山・小澤 2011a、丸山・小澤 2011b、丸山・小澤 2011c、丸山・小澤 2011d 他)。具体的には、オセアニア地域の一大学から日本に派遣された留学生 5 名を対象に、各調査協力者の留学前・中・後に PAC 分析インタビューを実施してきた。

調査手順は、基本的に内藤(2002)に沿ったが、読解刺激文を与え、フェイスシートに基づくインタビューを追加した。刺激となる読解教材の選定にあたっては、読解教材が学習者に与える影響の観察を目的とすることから、観察しやすさを優先しつつ、ステレオタイプ性の高い内容のテキストを採用し、留学前・中・後で異なる連想刺激を採用することにしたⁱ。その理由は、3~4ヶ月に1度の間隔で PAC 分析を実施することになるため、調査協力者が前回提示された刺激を記憶しており、その記憶に影響を受けて、調査時点での発想が現れにくい可能性があると考えたからである。

しかし、留学前中後に渡って同じ刺激を続けるほうが各調査時点の発想の違いを比較分析しやすいのではないかとすることも考えられる。

そこで、今回、同じ刺激を用いた縦断調査を実施し、調査協力者は同じ刺激であることをどの程度認識しているか、また、そのことが調査協力者の発想にいかに影響を与えているか探ることとした。

方法

調査協力者：調査は前述の 5 名と同様、オセアニアの一大学から短期留学プログラム生として 1 年間日本に派遣された学生 F(20 代)である。

発表者らとは今回の調査協力を依頼するまで知己がなく、留学中も発表者らが F を指導する立場にはなかった。

3 歳の頃から日本・日本語・日本文化と接点があり、その後現在に至るまでそれらとの接触が続いている。滞日経験として、中学校での 10 日の旅行の他、高校時代に 3 ヶ月、1 年間の二度にわたる留学体験を持つ。過去の留学は二度ともホームステイだったが、今回は大学の寮に住んでいた。日本語力は今回の来日時に既に上級に近いレベルにあり、やや漢字に苦手意識があるが口頭でのやりとりではインタビューもほぼ日本語のみで進められるレベルであったⁱⁱ。

手続き：

①~⑩の手順(調査協力者の視点から記述)に従い、来日直後・留学中・離日直前に発表者の研究室で PAC 分析を実施した。なお、手順②と⑧は内藤(2002)にはない手続きである。調査協力者の許可を得て、全ての発話を IC レコーダーで録音し、逐語的に書き起こして分析に使用した(所要時間などは表 1 の通り)。

① 契約

② テキスト(読解刺激文)が与えられる。

読み物は石川他(1993)『日本語 2nd ステップ』第 19 課の「酒」で、日本の酒文化が日本事情的に紹介されたものである。読解本文の日本語のレベルは中級前半で、簡単な語彙リストが付されている。

酒

我々の生活の節目には、必ずといっていいほど酒が登場する。「新年会」から「忘年会」まで一年中何かと酒を飲む機会が多い。

「つきあい酒」といって、仕事が終わったあと、遅くまで職場の人たちと酒を飲むこともある。こうした酒は、人間関係を確認する手段にもなり、「飲みに行きましょう。」と誘われると、断るわけにもいかない。飲みたくなくても、無理やり飲まされてしまうこともあるかもしれない。しかし、いっしょに酒を飲むことで、仕事

のストレスを解消することもできるし、職場では見られないその人の一面を発見することもあるだろう。

昔から「酒の席は無礼講」と言われ、酒の上のできごとは、大目に見られることが多い。しかし、いくら酒に酔っていても、他人に迷惑をかけるのは、いいことではない。特に酒を飲んで車を運転すれば、危険なことは、だれでも知っているはずだ。「飲んだら、乗るな。乗るなら、飲むな。」という標語を忘れてはなるまい。また、飲み過ぎると、次の朝は頭痛がしたり、吐き気がしたりすることがある。

酒の誘いを断ると、つきあいが悪いと思われがちだが、最近の若い人の間では、仕事と自分の生活をはっきり区別して、「つきあい酒」につきあう人が減少する傾向がある。

- ③ 以下の連想刺激文が口頭および文書で与えられる。

これは外国人のための日本語の教科書です。あなたはこの文章に書かれている日本について、どう感じましたか。あなたの感じたことを、言葉やイメージで表してください。書く時には思いついた順に、順位の番号をつけてください。

- ④ 思いつくままに連想したことばを1語ずつ1枚のカードに書く。
A4を16等分したサイズの紙を用意し、枚数は制限しない。
- ⑤ カードを重要な順に並べる。
- ⑥ 各カードの組み合わせについてイメージの近さを直感的に「非常に近い<1>」から「非常に遠い<7>」までの7段階で評価する。
- ⑦ 休憩（フェイスシートⁱⁱⁱに記入する。調査実施者はデンドログラムを作成^{iv})
- ⑧ フェイスシートに記入した内容について簡単な補足質問的インタビューを受ける。
- ⑨ デンドログラム（図1）に基づいたインタビューを受ける。
- ⑩ 各連想項目のイメージ（プラスかマイナスかニュートラルか）を評価する。

表1 調査実施時期・所要時間など

	来日直後	留学中	離日直前
調査実施日	2010年 5月中旬	2011年 1月初旬	2011年 3月末
補足インタビュー所要時間	約1時間 ^v	43分	24分
PACインタビュー所要時間	54分	2時間 14分	1時間 35分

使用分析ソフト：SPSS vers.15

結果

図1のデンドログラムを見ると類似する連想語がいくつかあるなど、同じような内容のクラスター（以下、CL）が存在するように見える^{vi}。実際、来日直後のCL3<Is it really was it?>、留学中のCL1<X's day^{vii}>・CL3<Stop>・CL4<What happened>、離日直前のCL2<気をつけてほしい>に出てくる連想語群は、F自身にとってもいつも出てくるものだと感じられていた。

例えば、Fは留学中のインタビューの最後に、今回と同様のことを来日直後も言ったと思うと述べている（以下、□内はFの発話、（ ）内は発表者らによる補足）。

その、4つ目のグループ（CL4）、ほとんど前も言っていたかもしれないですよ。と、1つ目（CL1）と4つ目が。あ、で、3つ目（CL3）はもう、絶対言っていたと思いますね。

離日直前のインタビューでも、CL2についてのイメージを問われた際に、自分がこれについていつも言及していると指摘している。

でも、すごく、うん、これ（CL2）が一番、ま、毎回出てきますよね、このグループが。（略）で、何回もやっても絶対出てきますね。これ（CL2）。

これらのCLではいずれもFの出身国であるXの飲酒文化に対する否定的印象が挙げられているが、前述の発話を見ると、以前に想起したイメージを覚えていたから同じことを語ったというわけではないようだ。それよりもFが飲酒に対する強い思いを子どもの頃から持っていたことの影響が大きいように思われる。例えば来日直後には次のように語っている。

特にXのその飲み方が本当にだめだと思いますね。すごい、結構熱くなりますよね。こういう話になると。（略）すごい人生もったいないって感じですね、みんなずっと飲んでて、なんか、記憶がない、ほど、いっぱい飲んでいるので友達との大事な時間をいつも忘れてて、その、飲み会、以外の思い出はすごく少なくて（略）子どもの頃からみんなその、酔っている親とか、ま、みんなじゃないけど、見てて、それすごい、残念だと思いますね。（略）その子どもたちがすごくかわいそうだと、思いますね。

Fは三度ともこれに類する内容を語っているが、インタビューを重ねるごとに飲酒を嫌う気持ちと自分自身との関係について内省を続け、語りの内容にもそれが反映されていった。

例えばFは上述の、来日直後の発言に続けて、自分が子どものころから酒に否定的な気持ちを持っていたのに、今は飲んでしまって、「その、社会に入ってしまう自分もすごい、なんかむかつく」と述べている。ここで語られた自己

矛盾は PAC を受けたことで初めて意識化されたことのようにだった。特に、飲酒に対する否定的な考えが現れたのがデンドログラムの一番下だった点に注目し、F は次のように語っている。

その 3 つ目(CL3)のところを見るとすごい感じますね。だから、全部、全部見ると、なんで最初からそうじゃなかったのって感じですね。なんでこの、あの、3 つ目が 1 番大事だと思っていますね、なのに、ま、今の自分は、隠してる。何かを隠しているっていうような、ま、この順番で見るとすごい、ず、今の自分はまだなんか足りない、足りないっていうか、弱いて感じですね。理想的な自分だったらこの 3 つ目のところが 1、1 つ目(CL1)のところ、うん、う、うん、そうですね。なんで、そんなに簡単に説得されたんだろうって思いますね。

F は、連想語を書き出す際に、これ以上ないと言って手を止めたがもう少し考えるよう促されて書き続けるということが二度あった。二度目に手が止まった時について F は、「たぶん。そのときは、やっぱりここから絶対暗くなるって、たぶん、まあ、もう分かったたというか(略)これからも暗いことばかりだと」感じていたのではないかと振り返っている。そのため CL3 に出会った時に、そういう考えを持っているのに隠している「自分との戦い」を感じたようである。これは PAC 分析が F に振り返りと気づきを促していることがわかる事例と言えよう。

インタビューに先立って持っていた考えだけでなく、デンドログラムを見ながら内省しつつ F が語っている様子は、これ以外の箇所においても観察された。例えば留学中には「(CL1 全体を見ると)自分の矛盾とか感じます」として、次のように述べている。

なんか、これを見るとやっぱり飲むのは、別、そんなにいいことだと思っていないような、に見えるんですけど、なんか X とか日本でも毎週飲んでますよね。だからこんなに好きじゃなかったら、なんで飲んでるんだろうって感じがしますよね(略)飲むのがよく問題とかを起こすって思っているように見えますよね、これ。(略)何かお酒とかを責めてるような感じがしますね。

この発言からは、F がデンドログラムに表れている自分の考えを第三者的に眺めて気づいたことを語ろうとしているように感じられる。

CL4 に見られる飲酒に対する否定的印象についても「昔からちょっと考えていることとか、今までにずっと考えている、感じてたこと」と述べる一方、「また自分の矛盾とか感じていますよね。変わったなあって感じがしますよね。」と、その場で考えて気づいたことも述べている。

また、留学中の調査時には、飲酒の話をする

と自分の子どもの頃を思い出すけれどもそれがなぜかはわからないと F は述べている。

なんか自分の子どものころを思い出す(略)子どもの頃はすごいお酒に反対だったんですね。なぜかわからないんですけど、なんか、もう、きっかけとかはなかったんですけど、ただもう、なんか反対でしたね。で、別に親とかあんまり飲んでないし、なんか、ね、そういう環境で育ったようなことじゃないし、ただ、なぜかわからないけど。反対になったんですね。でも、自分は一生飲まないって思ってたんですね。

F は離日直前には、これが気になって PAC を受けた後も考え続け、その結果思い出したことがあるとして、次のようなことを語っている。

お酒飲んで車運転するのは何よりも許せないって、さっき、思い出したっていうかなんか、いつもこういうグループができますね。で、その、なんでだろうねって、だって、本当に理由がないんですね。だからなんでこんなに強くこんな風を感じるか、もう、全然わからなかったんですけど、実は、おば、ひいおじいちゃんが、あ、飲酒運転で、なんて言うんだっけ、飲酒運転の人に、ひっぱら、ひかれて、死んじゃったのね。で、それ、おばあちゃん、お母さん、なんか家族の前、みんなレストランとか出て、そのままひかれて死んじゃったのね、その前で。だから、だからそんなに強く感じるかなあって。

(略) 5 歳とかのお母さんがもう、ね。おじいちゃんの死んだところを見ちゃって、それ、ね、なんか、それは許せないねって感じですよ。だから、だからたぶん、お酒に対してこんなに強く、感じると思うんですよ。(略) ずっと考えてたんですよ。なんでだろう、なんでそんなに強くなかなかマイナスな感じで思っているんだろうって思ってた。やっぱりあれかなって(略) たぶん、その、子どもの頃聞いた話、が、きっかけだと思うんですけど

この一連の語りからわかるように、F は子どもの頃から飲酒に対する否定的印象を持っていたこと、そして飲酒しないようにしていたのに今では自分も飲んでいることを以前から認識していた。しかし、そこに自己矛盾があるという気づきや、なぜそこまで強く飲酒を責めるのか考えたいという気持ちは PAC を受けて初めて意識に上ったものであった。そして内省を続けた結果、離日直前になって、それが幼少期に聞いた家族の体験と結びつくのだと思いついたのである。

飲酒が F にとって個人的に大きな意味を持つトピックであったことが、初回調査時から F に内省を促すきっかけとなった可能性が高い。しかし、F が何事につけてもよく考える傾向を持つことも関与したと考えられる。その傾向は、例えば飲酒文化以外のことについて語る中でも、「なんだろうね、なんでだろうね」と自問した

図1 インタビューで提示したデンドログラム^{viii} :

*項目の左にある数字は重要度順、クラスターの名付けは協力者によるもの。

< 来日直後 : Finding Balance >

CL1: Just another weekend

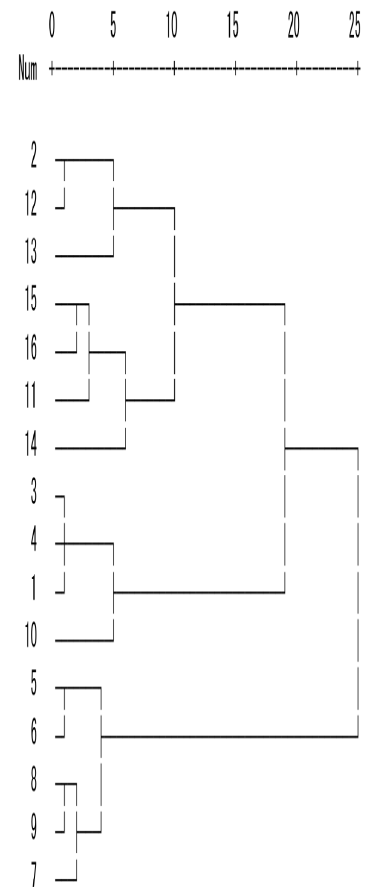
- ② Started remembering various drinking events I've been to and how they're very different in both countries.(+)
- ⑫ Feel that it's probably more acceptable to drink more and cause trouble to colleagues in X than in Japan.(0)
- ⑬ Felt that it was clear that we probably drink more in terms of quantity in X.(-)
- ⑮ I felt it seems stricter in Japan. I think there would be more room for refusal in X.(-)
- ⑯ Felt that people probably drink with their colleagues in Japan more than in X.(0)
- ⑰ Feel that drinking in Japan is more of an occasion, i.e. It is usually for a reason of some sort rather than just getting drunk like it often is in X.(0)
- ⑲ Felt that young people in both countries are more similar in their wish to keep their work and private lives separate.(+)

CL2: The way we were

- ③ It wasn't stressful to read because the content was easy to understand because it's a common subject. That's easy to relate to.(+)
- ④ It was easy to relate to because I could remember similar experiences that I've had.(+)
- ① I felt that I knew what they were talking about because there were similarities to X. The concept was similar.(+)
- ⑩ I liked the saying about drink driving because we have them in X too so it made me remember those.(+)

CL3: Is it really was it?

- ⑤ Don't really like the idea of using alcohol to relieve stress etc.-think there are probably much better ways of doing.(-)
- ⑥ Feel that society puts too much pressure on drinking. I wish that there wasn't such a big drinking culture in X.(-)
- ⑧ Felt that I wish we didn't have to go out drinking to get to know people we work/go to school with better.(-)
- ⑨ Felt quite sad that people are often forced to drink when they don't really want to but realise that it's a very easy thing to do.(-)
- ⑦ It made me realise how many of the social interactions we have involve alcohol.(-)



< 留学中 : A Long Way Down >

CL1: X's day

- ⑮ Japanese 'Drunk' and westerners 'drunk' different. (for the most part)(0)
- ⑮ Miss drinking in X sometimes because it's easier and less stressful for the most part(+)
- ⑯ Think drinking in Japan and X serves different purposes.(0)
- ⑳ Drunk people at bowling was interesting - wouldn't see that in X(+)
- ② Drinking in bars/restaurants more expensive in X.(0)
- ③ No such thing as nomihodai in X - would be disastrous(0)
- ⑨ What is an alcoholic?(-)
- ⑬ Wish there wasn't such a big drinking culture in X.(-)
- ⑭ Don't think Japanese girls drink as much as X girls.(0)

CL2: やっぱり違うよね

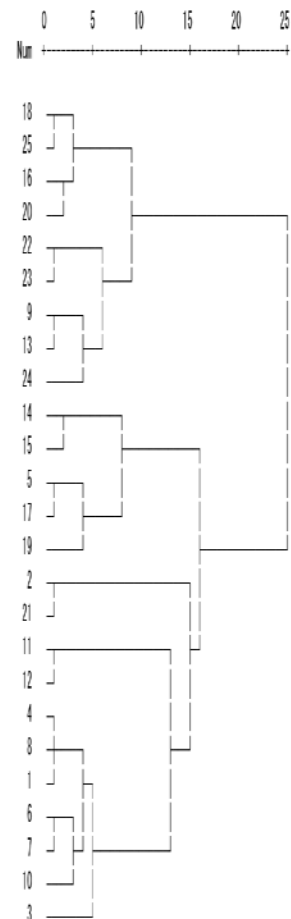
- ⑭ 仕事と自分の生活をはっきり区別するのはいいことだと思う (サラリーマンなど) (+)
- ⑮ 日本人のストレスと外国人のストレスはちがうかもしれない。(0)
- ⑤ 日本はきびしい(0)
- ⑰ タイで友達が飲まなかった(+)
- ⑱ Think most Japanese people would be surprised if they saw the way High school and university students drink in X(-)

CL3: Stop

- ② 飲んで運転するのはゆるせない(-)
- ⑲ Don't drink and drive slogans are せいかいきょうつう(-)

CL4: What happened

- ⑪ マックドナルドのおにいさん 僕たちがおいだされた(-)
- ⑫ 日本で人に迷惑をかけるのはすごくかんたん(-)
- ④ 無理やり飲ませるのは良くない(-)
- ⑧ Wishes people would only drink to have fun(-)not to drink away their troubles etc.(-)
- ① used for stress relief isn't good(-)
- ⑥ お酒で人間関係を確認するのはわるいことだと思っているのに自分でもやる(-)
- ⑦ People encourage you to drink but then complain if you drink too much or something happens. Annoys me.(-)
- ⑩ Don't like when people become different when they drink.(-)
- ③ 日本人は断れると思う(0)



< 離日直前:命の種 >

CL1:道

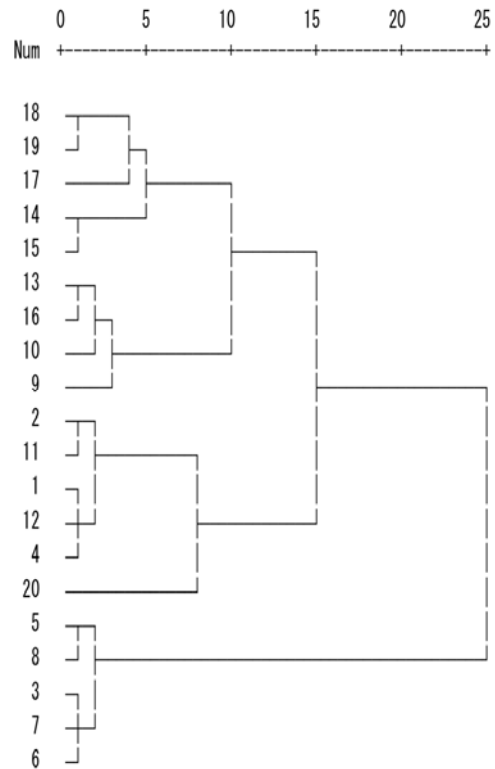
- ⑱ X で酒に酔って他人に迷惑をかけるのはよくあること。日本よりいっぱいあると思う。(0)
- ⑲ X の「迷惑」と日本の「迷惑」はぜんぜんちがうと思う(0)
- ⑰ 日本の職場はすごくきびしいと思う(0)
- ⑭ 日本より X の若い人たちのほうが仕事と自分の生活をはっきり区別していると思う。(0)
- ⑮ 中学校や高校の時もみんな学校と自分の生活をはっきりしている(X)(0)
- ⑬ 日本の「つきあい酒」と X の「つきあい酒」はちがうと思う。(0)
- ⑯ 酒はパーティーに行く時や友だちと遊んでる時しか飲まない。(+)
 - ⑩ 友だちといっしょに飲むのは一番好き(僕は)。(+)
 - ⑨ だれかと飲んだらその人のふだん見られない一面を発見できるといふことはよくわかる。(+)

CL2:気をつけてほしい

- ② 無理やり飲ませるのはゆるせない(-)
 - ⑪ 飲み会に断れないのはなんかざんねんとかんじる(-)
 - ① 酒飲んで車を運転するのは何よりもゆるせない。(-)
 - ⑫ 「飲んだら、乗るな。乗るなら飲むな」というひょうごが好き。(-)
 - ④ ストレス解消のしかたとしてお酒を飲むのはいいことじゃない。(-)
 - ⑳ ふつかよいはすごくきらい。(-)

CL3:さようならはまた会えるの裏返し

- ⑤ 人となかよくするのは酒があってもなくてもすごくはやくできること(+)
- ⑧ 一晚中友だちとしゃべったりするのが大好き。(+)
- ③ 一年間って早い(-)
- ⑦ 日本語とのつきあいは長い。(+)
- ⑥ 送別会ってなんかつらい(-)



り、「うーんうーん」と考え込んだり、「あー、だからか」などのように、考える中で気づきを得たことがわかる反応にも見て取れる。また、F 自身も「僕は結構考えすぎる人ですね。寝る前とか、いろいろいつも考えすぎちゃって、なんかずっと頭の中で、なんかこう考えているんですけど」と自分の性向について言及している。

ところで、飲酒は F にとってこれだけ大きな意味を持つ話題であったわけだが、だからといって読解刺激文から想起することが、F の留学体験の進行と無関係に飲酒についてのみ語られていたわけではない。留学して体験したことが各調査時に複数想起されていた他、CL 全体の名付にも象徴されるように各回の語りの焦点が、出身国での体験との比較から自分の過去・現在の振り返りを経て、帰国に伴う別離そして再会や新たな出会いへの期待が感じられるものへと変わっていた。つまり、同じ刺激を提示されても、各調査時の F の意識が引き出されていたのだと言えるだろう。

総合考察

F の事例では、同じテキストを刺激として複数回 PAC 分析を実施した場合に、以前連想したことを単純に反復する形で二回目以降のイ

ンタビューが進んでいるわけではないこと、同じテキストをもとにしていることが内省を深めるきっかけになっていることが確認できた。従って、F の場合には同じ刺激を用いたことはプラスに働いたと言えるだろう。

ただし、この「酒」というトピックが F にとって、幼少期の体験につながり、その後も考え続けて来ているという、個人的に強い反応を喚起するものであること、F が内省型思考を持っていたことを考慮すると、発表者らの研究において調査協力者に対し常に同じ読解刺激を用いるべきだとは言いきれない。調査協力者の性格や刺激の話題によっては、全く興味を持たないトピックについて繰り返し想起するよう強いてしまう可能性も考えられるからだ。その場合、調査の成否だけでなく、調査協力者にとって PAC を受けることが苦痛となり調査協力者に利のない調査となることが懸念される。

一方で、調査協力者の胸に響くトピックであることがテキストの日本像とは異なるイメージの提示につながる気づきを得る可能性(丸山・小澤 2011c、丸山・小澤 2011d)を考えると、異なる刺激に対する反応の変化を調査協力者の「ステレオタイプ像」に対する時系列の変化と断定することも難しい。

発表者らの調査研究における刺激の選定は、

これらの点を踏まえて再考する必要があるが、例えば調査期間を通じて同じ刺激を用いることにし、調査開始時に複数の刺激を提示して調査協力者自身にそれらの中から自分が読みたいと思うものを選んでもらうことも考えられるだろう。今後の課題として検討したい。

文献

石川恵子・山本忠行・鈴木宣行・山岡政紀 (1993) 『日本語 2nd ステップ』白帝社

小澤伊久美・丸山千歌 (2009) 「PAC 分析における好ましい統計処理とは—ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために—」『ICU 日本語教育研究』6、ICU 日本語教育研究センター、27-47 頁。

内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版。

丸山千歌 (2007) 「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想—学習者とのインタラクションの解明に向けた PAC 分析の可能性—」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184。

丸山千歌・小澤伊久美 (2008) 「PAC 分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題—日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』15、3-19

丸山千歌・小澤伊久美 (2010) 「日本語学習者と読解教材のインタラクションの解明に向けた縦断的調査—PAC 分析を研究手法として—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』17、101-133。

丸山千歌・小澤伊久美 (2011a) 「日本語教科書に見られるステレオタイプを日本語教師はどうとらえたか—多様な日本語学習者への実践経験を持つ日本語教師へのパイロットスタディー—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』18、33-52。

丸山千歌・小澤伊久美 (2011b) 「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか—日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆—」『日語教学研究』徐敏民主編、華東師範大学出版社、203-213。

丸山千歌・小澤伊久美 (2011c) 「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ—PAC 分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から—」、異文化間教育学会大会、於お茶の水女子大学、

2011 年 6 月 11 日)

丸山千歌・小澤伊久美 (2011d) 「留学経験から考える日本語教育の可能性—PAC 分析を活用した縦断的研究から—」、世界日本語教育大会、於天津外国語大学、2011 年 8 月 20 日。

* 本稿は、平成 23-25 年度科学研究費 (基盤研究 (C) (基金)) 「留学経験から発想する日本語授業の新たな意義—PAC 分析を活用した縦断的研究—」 (研究代表者: 丸山千歌、課題番号: 23520617) の取組の一部である。

(OZAWA, Ikumi, MARUYAMA, Chika)

i ステレオタイプ性の強さについては、発表者らの主観的判断を排除するため、日本人の日本語教師 10 名に「①日本や日本人についてのステレオタイプ的な要素が含まれていると思うか、②含まれていると思う場合、どのようなステレオタイプか」という観点から、複数の読解教材を評価してもらい、その結果を活用して、発表者ら 2 名が、日本語のレベル、教材の普及度を加味し選定した (丸山・小澤 2011a)。

ii PAC 分析の使用言語は、本来は調査協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされているが、本人の希望により状況に応じて使用言語を選択することとした。その結果、ほとんどの発話は日本語でなされ、英語はごくまれに適当な表現が日本語では思い浮かばなかった場合に使用されたのみであった。

iii 丸山・小澤 (2008) に基づき、調査協力者の基本的属性の他、日本に関するモノゴトとの接触状況について尋ねるもの。留学前・中・後とで日本・日本人に関する情報へのアクセスの経路、頻度、情報の内容の変化を追うことを目的とし、具体的には、メディア (新聞・雑誌・インターネット・TV・その他)、人間 (家族・友だち・教師・その他)、日本語のクラスへのアクセスの頻度、重要度 (重要<5>から重要ではない<1>の 5 段階評価) を尋ねた。

iv インタビューで使用したのは SPSS の階層的クラスタ分析 (ウォード法) に⑥で得た非類似度行列をそのまま投入して析出したデンドログラムであるが、PAC 分析の総合考察の際には、小澤・丸山 (2009) を踏まえ、SPSS の K-means と ALSCAL、HALBAU7 の階層的クラスタ分析 (ウォード法) で分析した結果も参照している。

v 録音した逐語資料があるのは、うち 29 分間分
vi この他にも「日本人はきびしい」に類する連想語や、同じエピソードが繰り返し想起されているが、インタビューでの語りを聞くとその意味するところはあまり重ならなかった。発表当日時間が許せば紹介したい。

vii X は F の出身国名

viii 非類似度行列は紙幅の都合で省略した。プラスマイナスはインタビューの終盤に得た情報。